

『コミュニケーション紀要』 第24輯 2013年3月 抜刷
SEIJO COMMUNICATION STUDIES Vol.24 MARCH 2013

社会学的記述

南 保輔・海老田 大五郎 訳

A Japanese Translation of Harvey Sacks' "Sociological Description"

MINAMI Yasusuke & EBITA Daigoro

社会学的記述¹⁾ [訳注]

ハーヴェイ・サックス²⁾
南 保輔；海老田大五朗[†] 訳

序文

本論におけるわたしの関心は、Durkheim の『自殺論』と Weber の方法論的諸著作を読むことから最近数年間におこなってきた思索について予備的な [preliminary] 報告を提示することである。

この草稿においては、議論の要旨がただスケッチされるだけで、解決への方向性がかろうじて暗示されるにすぎないのだが、わたしの考えの骨子が理解可能なものであることを願っている。

イントロダクション

本論でのわたしの関心は、現在の社会学を奇妙なものとする事だ。その主題 [subject matter] にたいして現在の社会学が採用している立場は、わたしにとってとても奇妙なものであるように思える。その一方、多くのその [社会学の] 実践者にとってはとても自然なものであるようだ。そのため、社会学的装置 [sociological apparatus] と社会学的主題 [sociological subject matter] との関係を再構成する試みが必要だと思われる。

まず最初に、議論の予告編を提供しよう。

わたしは少なくとも、社会学という学問をひとつの科学にしようとしている社会学者がいることと理解している。これ [社会学をひとつの科学とすること] はわたしも共有する関心であるが、こ

のような関心というパースペクティブからのみ、以下の議論は適切なものとなるように思われる。

科学者としてわたしたちは、わたしたちの主題の文字どおりの記述を産出しようとする。記述するために、わたしたちは言語を構築する (もしくは、われわれの用法にあわせて言語を用いる)。わたしたちの言語から始めるのは粗雑なやり方であろうが、一つの規則が常に留意されていなければならない。それは、わたしたちが主題として取り上げるものは、それが何であれ記述されなければならないという規則だ。なんであれ、それ自身が [すでに] 記述されてしまっているものでなければ、わたしたちが主題として取り上げるものはわたしたちの記述装置の一部として登場することはできない。以下の段落では、この前の文に表現された考え [一つの規則] が再度述べられることになる。

社会生活の一部分は、人びとによって言語が利用されるということから成り立っていると社会学者は想定している。社会生活の他の部分とまったく同じように、ひとが利用している言語も、最終的には記述されなければならない主題を構成するが、それ [その主題] は記述されたときのみわたしたちの装置の一部となりうる。

人びとの使用する言語と人びとの行動のほかの部分との関係について、多様な仮説がありうる。社会学の仮説で好まれているもののひとつを考えてみよう。日常生活において人びとは、社会生活についての合理的な程度に正確な諸理論を持って

[†]新潟青陵大学看護福祉心理学部助教
ebita@n-seiryu.ac.jp

いるという仮説だ。[このとき] 人びとが利用する言語は人びとの諸理論を表現し、さまざまな活動についてあるひとつの記述を構成する。かれらが見る活動のある区分^{訳注2]}を記述するためにこの言語を利用^{訳注3]}することによって、人びとは活動のさらなる[続く]区分のひとつを予測することができる。この仮説は、つぎの説明で締めくくられる。この予測を手段として、人びとは互いの行動に適應することができるのだと。

[さて] この仮説はどのように使用されるのだろうか。

(人類学者とは対照的に) 社会学者は典型的には [typically], 社会学者が研究しようと提案している対象者の自然言語を知っている。社会学者は、自然言語で表現されている規範のあるカテゴリー(工場の規則や法的規則などなんでも)を選ぶ。社会の成員として、社会学者は規則のことばが何を意味するか知っている。すなわち、社会学者は規則のことばが適用される活動や、活動がなから構成されると規則のことばが特に意図しているかを知っている。社会学者は、そのような活動が生じると予想できる場所に赴き、そこで規則のことばがその記述となる、もしくはそうならない(すなわち、規則が従われるときと破られるとき)出来事が発生する相対的な頻度を観察する。³⁾

典型的には、社会学者は多くの行動が規則の指揮下でとらえられることを見つける。そして、社会学者が「興味深い」ものとして提起する問題は、逸脱を説明することだろう。結局のところ、なぜ人びとが同調するのは容易に理解できると社会学者は言うかもしれない。

わたしは、この手続きは、まさにその第1歩から、社会学が社会生活を主題とするとき請け負う仕事を誤解していると主張する。⁴⁾

わたしたちが主題とするものは記述されなければならないという前提条件に照らして、(上で述べられている)[日常生活において人びとは、社会生活についての合理的な程度に正確な諸理論を持っているという] 仮説をまず提起し、つぎにそれをテストするためには実際に何が必要かを考えよう。

その最初の部分を考えよう。ひとが利用する言語は、他の[言語以外の]行動の記述を構成するというものだ。

わたしたちにとって第一の問題は、人びとの言語のある区分と、人びとのほか[言語行動以外]の行動の区分を記述することである。⁵⁾

第二に、わたしたちは、言語のある区分が行動のある区分の記述を構成するかどうかを決定するための規準を必要とする。まず、ひとつめの規準として認識[recognition]を採用することしよう。

第三に、人びとの言語のある区分についてのわたしたちの記述と、かれらの他[言語行動以外]の行動のある区分についてのわたしたちの記述を整列[align]させたところで、行動のある区分を人びとが何であると認識するだろうかをわたしたちは予測する。⁶⁾

もしわたしたちの予測がある合理的な程度の正確さをもつならば、認識という規準は満たされたとわたしたちは言うことができる。つまり、言語と行動のあいだにある限定された関係があれば、わたしたちが先の仮説の強力バージョンをテストする準備ができる。

第一に、わたしたちは、わたしたちが記述した言語のある区分と、わたしたちが記述した他の行動のある区分を選択する。わたしたちはある種の関係が確立されている区分同士を選ぶ。

以下のことを選ぶことにしてみよう。つまり、

強い意味での記述として人びとの言語行動の一部をとらえるための規準として、自然に生じる「他の〔言語以外の〕行動」のある一部から他の行動のさらなる一区分を、この記述を手段として予測できるということをわたしたちが選択するとしよう。そのとき、わたしたちの問題は次のようになる。

第二に、行動のある区分のわたしたちによる記述を手段として、その行動を人びとが何として認識するかをわたしたちは予測する。

第三に、もしわたしたちが正しいことが示された〔人びとの認識を正しく予測することができた〕ならば、わたしたちは人びとが産出した言語のその区分のわたしたちによる記述を手段として、他の行動のさらなる一区分が発生したとき、さらなる言語の区分のどんなものを人びとが産出するかをわたしたちは予測する。わたしたちは、われわれの対象者〔subject〕に「推測〔a guess〕」を求める。もしわたしたちが正しいなら、わたしたちはさらに先に進む。

第四に、問題の行動が発生したとき、わたしたちの対象者がそうだろうと推測した行動と認識されるかどうかを予測する。

もしわたしたちの予測が正しく、わたしたちの予測がそれは認識されるだろうというものであったならば、つまりそれが、人びとが生じるだろうと推測した行動であったならば、わたしたちは当初の仮説が合理的である、つまり、証拠がそれと一貫するかたちで産出されたと言ってよいだろう。（わたしたちは、対象者の「推測〔guesses〕」について語ることから、かれ〔対象者〕の「予測〔predictions〕」について語ることへと優雅に移行できるだろう。）

わたしは、つぎのように言ってもよいと思う。まず第一に、たったいま概説したような手続き

〔後者〕は社会学者によって採用されたことはない。第二に、そのまえのところで概説した手続き〔前者=78ページ〕は典型的な社会学の手続きである。第三に、最後に概説した手続き〔後者〕は、社会学者にとってとても奇妙なものに見える。

わたしには、後者よりもむしろ前者の手続きが奇妙なものであるように思われるので、本論の主要部分の関心は、わたしがすでに言ったことだが、現在の社会学を奇妙なものにすることとなる。

次のセクションでは、わたしは社会学が現在その主題に対して採用している立場の特徴を明らかにするために、ひとつの「代表的隠喩〔representative metaphor〕」を提示する。

I

産業科学博覧会において、素人が以下のように記述する機械と出会うということを考えてみよう。この機械には2つの部分がある。第1の部分は、ある動作を行う。もうひとつの部分は、同時に、第1の部分がしていることを声に出して述べる。これを、この機械についての「常識的」視角と呼ぶことにしよう。⁷⁾ 常識的視角にとっては、この機械は「コメンテータ機械」と呼ぶことができる。その部分は、「動作部分」と「言う部分」とである。^{訳注4)}

さて、〔素人ではない〕ほかの人びとがこれをどう見るかを考えよう。

もしも外国人のエンジニアがこの機械と出会うとすると、かれも2つの部分を「見る」かもしれない。言語はわからないものの、観察によって機械がしているのがなにかはわかるので、エンジニアはこれを、言語を教える機械として扱うかもしれない。つまり、機械がしていることを見て、機

械がなにをしているかを自分の言語で自分に言い、動作部分に伴っている録音を聴いて、動作部分を記述するものであるかもしれないかれの言語におけることばに対応する、英語のことばを学ぶことができる。これを、常識的視角の「よそ者 [stranger]」バージョンと呼ぶことができよう。⁸⁾ よそ者の常識的視角からは、この機械は認識された「何をしているかがわかっている」活動に従事している。ただし、それは異なる言語にしたがって知られているものである。この機械を理解することが提起するものとかれがみなす問題は、「適切な翻訳」というものである。⁹⁾

さらに、2つのよりラディカルな視角がある。

この機械が行っていることも言語もその両方がわかるだれかがこの機械に出会うとしよう。かれにとって、そしてかれにとってのみ、部分間の関係に問題がありうるものが考察可能である。かれがすでに理解しているところの動作部分の記述と、(言う部分の発することばという) その記述として意図されているものとかれがとりあえずみなすものとのあいだにずれがあるとすれば、かれは、言う部分で使用されていることばがまずい記述であるとか、明瞭化が必要であると決定できると言える。あるいは、動作部分と言う部分とのこの同じ組み合わせを見て、機械の動作部分がうまく働いていないとか、あるいは、「そのようなものとして記述されている機械」の貧弱バージョンであるとか、決定できると言える。

あるいはまた、かれは、言われていることが隠喩的、あるいは皮肉っぽい、あるいは、「ただのスケッチ」、つまり文字通りだが提喩的だとかと決定できる立場にある。しかも、これを決定できる立場にいるのは「4つの遭遇者のタイプのうちの」かれだけなのである。¹⁰⁾ あるいは、かれは、動作が「そのようなものとして記述されている機

械」の理想化されたバージョンであるとか、単純バージョンか、あるいは戯画化であるとかと決定できると言える。

部分間の問題ある関係について可能な解決策を考察するなかで、かれは「理論化」に従事していると言うことにしよう。ある解決策が「その関係のなんらかの調停」となるような、「部分間の問題ある関係」をかれ自身の問題として提起するとき、かれは「実践的理論」¹¹⁾に従事していると言うことにしよう。

実践的理論は、いかなる問題であれ、動作部分と言う部分として理解される2つの部分の「調停」がひとつの解決となるような、機械の理解が提起されると言われる問題を提起することからなりたつ。たとえば、発言をスケッチと捉えることや、動作を誤動作だと捉えることは(一方の部分を他方の部分についての考え方に一致させるための装置として)調停的な解決の例である。実践的理論のためには、以下の2つの「初期利点」¹²⁾が必要である。(a) 機械が発している言語を機械と共通して知っていることと、(b) 機械が行っていることをなんらかの言語において知っていること。つまり、これまでに論じた遭遇者「素人とよそ者エンジニア」は、それぞれの特有の不利を克服することによって実践的理論家となることができる。遭遇のタイプが相違しているのは、実践的理論家がある規律された仕方での調停に関心があるという点においてのみである。常識的な遭遇にとっては、調停は問題が生じたときにその経過のなかで産出される。

わたしが考察する最後の視角にうつろう。遭遇者が、機械の言語もそれがなにをしているかも知らないとしよう。ほかの遭遇者は、自分たちにある利点がかれにはないと言うかもしれない。このような立場にいるひとは多いだろうが、ナイーブ

な科学者が含まれているとわたしは考える。これまでの遭遇者たちも態度を変更することでこの視角を採用することができるので、わたしはこの科学者の視角を選択する。そして、読者にも、トピックとして社会的行動に新たに「調査しよう」と自分が接近していると想定してもらいたい。可能な視角間の比較を読者がするためにも、わたしはこのような要請をしなければならない。

もし、ナイーブな科学者が、かれがこの機械と出会う前に、この機械に出会った人びとによって提供された記述と称されるものを聞いたとしよう。そのとき、ナイーブな科学者にとってもっとも奇妙なことは、かれが人びとの報告を言い直すとき、それ「コメンテータ機械」についての科学をするという仕事を簡単にするためだけに構築された対象「object」が世の中にあるということだろう。

このような表現によってかれがおよそ何を意味しているかを見るために、わたしはこの隠喩を解釈しよう。

II

この隠喩は、(常識的なもの、実践的理論家あるいは現在の社会学のもの、そして、ナイーブな科学的という)さまざまな視角と対象との出会いについて述べるものだ。これら視角に共通するひとつの特性は、対象を理解するという関心を持つと表明していることだ。対象を理解することのなかで、それぞれの視角は、対象を理解することを構成する問題を提起し、その解決策として対象の「記述」を産出することができるかもしれない。

本論の問題は、隠喩の考察を進める前にレビューしておくならば、次のとおりである。「記述」という考えの意味が多様なものであること、

あるいは提案された記述の適切性を決定するための規準が多様なものであることを前提とするとき、(a) 現在の社会学はどのような規準を使用しているのか、そして、(b) 社会生活が社会学のひとつの主題を構成するという前提条件を踏まえるならば、社会学はどのような規準を使用すべきなのか。

本論の本質的「メッセージ」は次の通りである。たとえ、人びとが社会的世界の記述を産出すると言うことができるとしても、社会学の課題はそれらを明瞭化することでも、「それらを記録に書き留めること」でも、それらを批判することでもなく、それらを記述することである。人びとが社会生活を記述すること(もし人びとがそうしていると考えられるならば)は、それが社会学の仕事提起するという意味で、そして、その主題の諸活動を記述するという社会学の問題に対する解決策を提供するというのとは対照的に、ほかのどんな主題のほかのどんな生起と同じように、主題たる出来事の生起なのである。¹³⁾

さて、異なる視角が産出するさまざまな記述を比較してみよう。

最初に、最初の2つと第3の遭遇者(後者は現在の社会学者で、前者はだれでも)の類似点と差異とを考えてみよう。

1. 両者は、かれらが出会う対象の「2つの部分」の調停^{訳注5)}に従事している。
2. 両者は、自然言語から始めるだけでなく、自然言語を利用する。すなわち、かれらが出会う対象と共有して持っている(あるいは持つことを学習できる)言語を利用する。¹⁴⁾
3. 常識的視角を利用しているひとにとって、出会いの本質的な問題は、かれらの背景がそれぞれであり、その適切さはそれに応じて変動

することだ。うまくいった出会いとは、その対象が何をしているかや、どのように進行するか（その手段や目的）を知るためにその背景を使用することにある、とかれらは言うかもしれない。そのような成功から期待される成果は、その活動にたいして感知される適応がなされることにある。

4. 2つの視角の差異は、次のように説明することができる。その機械は繰り返しのサイクルをもつでしょう。それはある活動のひとつのコースを進行し、そのコースが終了するとまた最初に戻る。

常識的視角からは、出会いの問題は、出会い[の期間全体]のコースのなかでの問題として生じる。「記述」は、出会いが進行することを許すほどに「十分良い」ものでありさえすればよい。誤解の可能性は、誤解が実際に困難さを生じるまでそのままにされる。そして誤解が困難さを生じるときには、出会いが進行するのに必要な範囲でのみ解決されることが必要となる。

前者の分類における異なる遭遇者が「出会いについて」異なる報告をすることになるという事実は、当惑すべき原因ではない。それはそれぞれの出会いの独自性を証言しているだけなのだ。

後者の社会学者は、活動に対するかれの記述が科学的であることを保証しようとする。かれは、他のサイクルを観察する同僚によって産出されるであろう記述、または他のサイクルを観察するのに同僚によって使用されうるであろう記述、あるいは、機械の活動コースを分析するために同僚によって使用することができる記述を書こうとするのだ。

5. 理解における問題は、多少洗練された質問手

続き、すなわち尋問者と主題 [subject] の間に、質問に対する回答が、質問に-対する-回答を構成するようなある共通の言語があるという特性を持つ質問、を提起することにより、[常識的視角と現在の社会学の] 両者ともによって、解決されうる。共通言語の二重特性について注意しておこう。それは、尋問者が対象 [object] によって発せられる言語を（それに言及できるために）知っているのみならず、対象 [object] は尋問者の言語を知っているということである。かれの回答は、尋ねられた質問への回答であるだけではなく、回答は尋問者が対象 [object] について持っている質問への回答でもある。すなわち、回答そのもの、もしくは回答のあるバージョンは、尋問者の記述として報告できるということだ。¹⁵⁾ 上に書いた隠喩では、機械はやりとりを可能とする付属装置を持っているように見えなかった。だがそれは、単純化のためであった。機械の別モデルは以下のようにありうる。それは質問がされるまで沈黙している（あるいは、そのときまで音楽を演奏している、もしくは目の前の光景についてコメントしている）。質問がなされると、[おっしゃっていることはどういうことでしょうかといった] 明確化要求で応答することのほかに、それがそのときにしていることについての語り記述を発する。それへの回答がそのバージョンが実際に遭遇したことの自由に発せられる記述となるように質問のプログラムを工夫することができるだろう。これから見るように、バージョンがどんなものであっても本質的な違いはない。^{訳注7)}

6. 社会学者の著述と社会についてのほかのそれかによるトークとの唯一の違いは、社会学者

が「発見」したあるひとつの方法論的問題についての社会学者たちの関心にかかっているのは事実である。わたしはこの問題を「その他いろいろ（エトセトラ）問題」と呼ぶことにしよう。

エトセトラ問題： ある特定の「具体的な対象 [concrete object]」についての記述ですら完成したものではありませんという広く調査者によって認識されている事実と直面して、文字通りの記述という科学的要請はどのようにして達成されるべきか。つまり、どんなに長くどんなに徹底的な記述であれ、それが無限に拡張がなされるならば、ある記述はどのようにして [正しい・適切・完成したものとして] 保証されたものとなるのか。以下のことに注意するためにわたしたちはこれを「エトセトラ問題」と呼ぶ。具体的な対象（あるいは出来事、あるいは行為のコース、エトセトラ）についてのどんな記述にたいしてでも、どれほど長くなされたとしても、調査者はその記述を終わりにするために等々 [etcetera] という表現を付け加えなければならない。

社会についての社会学者と [ほかの] 「だれでも」の記述とのあいだのすべての違いが、この方法論的問題についての社会学者の関心にかかっているとわたしが言うとき、わたしは以下のことを意図している。

- a. 社会についての社会学と常識的トークの違いは、エトセトラ問題についての社会学者の関心という点から説明できる。
- b. 異なる社会学の間の違いは、この [エトセトラ] 問題への解決策の違いである。ひとつの社会学理論は、この問題についての、ある規律された「解決 [resolution]」を構成する。

- c. 社会学とその他の科学の違いは、トピックの違いだけではない。

次節では、[a から c の] これら 3つの点をはっきりさせていく。

その前に、わたしはこの議論を要約しておこう。現在の社会学は、「ナイーブな科学者」にとっては奇妙のものにうつるであろう。それは、現在の社会学が調停活動に従事するからではなく、調停活動が社会学自身の問題を解決する記述を生み出すと想定しているからだ。調停活動はその問題を解決する記述を産出するかもしれず、調停活動は社会学者にとってある効用があるかもしれない一方、もしそれが適切に着手されるならば、わたしのイントロダクションで素描された第二の手続きの線に沿って進行するであろう [実はそうはなっていないのだが]。この活動は、調停されるべき領域それぞれが記述された後に、また、それらが別個の領域を構成すると決定された後に、この [調停] 活動は行われるであろう [そうはなっていないのだが]。

社会学の出現は、(出現するときには) 他の科学の出現とは異なるコースをとるだろう。なぜなら社会学が出現するためには、社会学は哲学からではなく、常識的視角からその身を解放しなければならないからだ。社会学の先行者は、ガリレオが相手をしなければならなかったひとたち [宗教家] ではなく、平和の維持や犯罪の抑制といった実践の問題に関心ある人びとなのだ。常識的世界の「発見」は、問題の発見としてのみ重要なのであって、社会学的資源の発見として重要なのではない。

Ⅲ エトセトラ問題再考

わたしは、[エトセトラ問題再考という] この

議論を、そのなかで Weber の方法論上の議論を Parsons が解説している長い引用で始めよう。

Weber は、(略) つぎの命題を受け入れている。まったく具体的な歴史的リアリティは無限に多様で複合的であるため、その具体性と個別性の十全な豊かさにおいて、これをどんな抽象概念のシステムに照らしても把握することはできない。しかし、Weber はこのことが、[社会科学の] 自然科学からの差異の基盤となることも、科学カテゴリーの論理的性質の問題とどんなかたちであれ関連することのいずれをも拒絶する。すべての「生[なま]の」経験はこのような性格のものだ。われわれが「自然」についての科学的法則として定式化するものは、人間が「経験可能な」ものとしてさえトータルな具体的なリアリティではなく、その特定の諸側面[について]なのであり、これが抽象的な概念に表現できるものなのだ。人間行為についてもまったく同じことがあてはまる。これら2つの科学のグループの違いの基盤(そして、Weber はひとつはあると信じているのだが)がなんであれ、それはこの平面には存在しない。それはつぎの原則のなかにあるにちがいない。その原則によれば、リアリティの「経験可能な」諸要素のなかで、ある与えられた科学目的にとって有意義な「諸事実」が選択されなければならないというものだ。Weber の見解では、これ[2つの科学グループの違いの基盤]はその論理的に関連ある諸点に存在するのだ。つまり、ある科学が扱う「リアリティ」の客観的性質ではなく、「科学者の関心」という「主観的な」目的意識[direction]に存在するのだ。

(Parsons 1949: 581-2).

知識の適切さの基準のひとつは、そのときの科学の目的に相対的なものでなければならない。それがどんなものであれ、「すべての事実」にはおよばない。(略) これらすべての考察から以下のことが帰結する。しばしば適用される予測可能性という基準に関しては、自然科学も社会科学も論理的には同じ状況にある。いずれの場合も[自然科学も社会科学も] 詳細さの具体的な十全さのすべてにおいて現象の未来の状態を予測することは不可能である。自然科学における予測可能性は高いように思われるが、それはわれわれの関心が主として、既知の抽象法則に関して定式化可能な自然事象の観点にあるからだ。人間事象に関するわれわれの関心は概して、[自然科学とは]異なるレベルにある。いずれにしても、予測可能性は抽象的一般化の程度につねに^{訳注8)}相対的なものだ。そして、そのような[抽象的一般化が存在する]ところで予測可能性が生まれるのだ。Weber は用心深く以下の点も指摘している。じっさいの社会生活がいかに、他者がある刺激にどう反応するかを合理的な正確さで予測する能力にまったく依存しているかということだ。たとえば、もし将校が命令への服従、つまり命令が出されたあとの兵士の行動の予測、があてにできないとしたらどれほどの「軍国主義」が可能だろうか。実のところ、Weber が固有の関心を持っていたのは社会生活のまさにこの予測可能な側面だったのだ。(Parsons 1949: 582-3).

1. 社会についての社会学のトークと常識トーク

ここでは、社会についての常識トークと社会学が異なるのは、その記述においてではないということ論じる。

A. 対応の問題

社会学は社会生活の文字通りの記述を産出しようとする。文字通りであるかどうかの古典的規準のひとつが、提示されている記述と記述されるとする現象（志向される対象）との対応である。想定としては、完成した[complete]記述は対応性規準を満たし、^{訳注9]}それが文字通りであることについては疑問の余地はない。未完成の[incomplete]記述には、先の隠喩で言及された代替物のひとつ（たとえば、皮肉やスケッチなど）として読まれるという可能性が存在する。エトセトラ問題を受け入れることは、ただ記述を読んで対象を見るというだけでは対応が確立できないことを含意する。つまり、記述のほかに、両者の調停を確立するなんらかの付録を産出しなければならない。

提示されたいくつかの記述を比べるという問題を考えよう。いかなる記述も、ただ未完成であるだけでなく、(a)無限に拡張されることが可能であり、(b)この拡張は外挿のための公式によっては処理できない、という特性をもつので、どんな記述も完成からはほど遠いものとして、あるいは、完成に近いものとして、あるいはその他のものとして読まれうるということになる。さまざまな長さやスタイルなどなどの2つの記述をただ読むだけで、一方はより入念であるが他方はより簡潔だとか、一方はより広汎であるが他方はより集中的などなどと結論できるだろう。

では、さまざまな記述をただ読むことで、どれ

がより良い対応をもつということを、つまり、「より社会的」であるということはどうやって決定できるのだろうか。明らかに、書き手の適格性認定[書き手は適格者であると請負いますといった言明]は合理的な解決とはならない。方法セクションを付録としてつけてもだめだ、というのも、エトセトラ問題があると認めると「同じ方法」の適用が「同じ記述」を産出しないのだから、これ[方法の報告という付録]は(a)実際に使用された方法も、(b)方法の報告そのものも反映していないということが含意されているのだから、はっきりしていることだが、記述の適切さを決定するのに「書き手の目的」、あるいはさらに言えば論文を読むときの読み手の目的を使うことは解決にはならない。これはただ、適切さを確立するのに対応を使うことに含まれる問題を、(a)記述とその志向される対象との対応から、(b)目的と記述、および志向される対象との対応へと、単に移動させるだけにすぎない。依然として、われわれは調停の問題に直面している。いまや始めて、誰かが満足していることが、かれの同僚の満足のための適切な基礎を構成しているとわれわれは主張しようとしている。あるいはおそらく、かれの同僚の満足が、かれ自身の満足の適切な基礎となるのだ。

さらに、エトセトラ問題のこのような状況を前提とすると、つまり、対応の近さに照らして記述を比較する方法が存在しないということを前提とすると、「時がたつにつれて記述は良くなっていく」と言うことで対応できるような問題に直面しているのではないようだ。ひょっとすると、Weberの関心、そして「実践の問題」への多くの社会学者の関心は、社会的記述は累積的な性格を持っていないのではないのかというかれらの疑いに基づいて説明できるかもしれない。エトセ

ラ問題は、累積可能性にたしかに疑いを投げかける。

B. 一般化あるいは抽象化の問題

ちょうど社会の記述の適切さを決定する規準が存在しないように見え、したがって、記述の「社会学的性格」[社会学の記述として要求される文字通りの記述であるということ]を決定する規準が実際に存在しないように見えるのと同じように、エトセトラ問題は、抽象的記述あるいは一般化された記述という考え方についても興味深い含意を持つ。すなわち、どんな記述も「抽象的な」ものとして読むことができる。そして、抽象的の通常の意味（たとえば、数学におけるように）においては、いかなる記述も抽象的ではない。

考えてみよう。もしある特定対象の記述に関してさえ、それ[特定対象]の特性[feature]のうちのあるものをただリストアップできるだけとするなら、それを見つける教示としてその記述を使うことによってその対象を再把握できるであろうということは、けっして明瞭でない。しかし、ある記述が、そのなかからひとつを選ぶことができない（ゆえに、一般性の外観を呈する）一連の対象を指し示すものとして理解されるということはある。

これらの記述が数学で典型的にみられる意味での抽象的なものとなりえない理由は以下のようなものである。後者[数学]の種類的一般的概念は、特定事例の諸特性を保持している。つまり、ある一般化があたえられると、ある特定の対象をつねに再把握することができる。特定の対象の特性を無視している記述は、そのような再把握を許さない。そして、エトセトラ問題の意味するところが、特定対象のものでされている記述でさえその特性のなんらかの**不確定の集合**を無視するとい

うことなのだから、エトセトラ問題が受容されるとすれば数学の意味での抽象化が達成不能であることは明白だ。このことの重要性は、われわれがそう考えたいと望む以上にひょっとすると極端なものかもしれない。第一に、数学の意味での抽象的对象を持たないので、われわれの[社会科学における]いわゆる抽象的对象の不変性を保持するような変換の可能性をわれわれは画定することができない。第二に、予測は不可能だ。後者[予測が不可能だということ]がそうであるのは予測が前者[第一のこと]にはかならないからだ。つまり、予測とは抽象的对象の保証された[不変性を保持する]変換だからだ。¹⁶⁾

ある意味では、WeberとParsonsが、エトセトラ問題を取り上げたときに、一般化された記述を書くように導かれたのは正しい。だが、かれらが正しいのは些末な意味においてのみだ。つまり、人はエトセトラ問題を受容するかぎりにおいて一般化された記述を書くこともできるようになるという意味だ。特定対象の文字通りの記述をすることはできないのだから、そうして「もかまわない」わけである。しかし、特定事例についてのものであるとされるどんな記述も「そのような事例群」についてのものと読むことができるのだから、一般化された記述とされるものが[それ以上に]なにをもたらすかはまったく不明瞭なのである。

一般化記述を書くことについての不愉快な帰結は、一般的な対象の特定対象「バージョン」をひとは考えることになるということだ。そこで、世界のどんな対象も「不完全[imperfect]」（理想世界における理想対象のひとつのバージョン）として扱われる。たとえば、ある行動が理性的と記述される行動に合致しないとき、この対象は「部分的に非理性的」だとして語られる。人びとが理

性的でないと言ふことには意味がある場合があるが、人びとの行動が理想的な理性的人間に期待される行動に合致しないからといって、かれらが非理性的であることの証拠にはならない。それはただ、われわれの記述が不適切であることの証拠にすぎない。¹⁷⁾

もし主張されているのが、われわれの「抽象的」対象は特定の対象の集合の典型的特性を含んでいるということだけだとすると、この言明は無難なものだが、常識的な「一般化記述」にまさる利点として主張できることはなにもない。¹⁸⁾

本節では、われわれがしようと提案しているのが、常識的事柄を常識的に扱うよりもより良く扱うことだけだとすれば、われわれの優位を主張する根拠はないということを論じてきた。もしその代わりに、われわれは異なる仕事をしようとしていると主張するのなら、この主張を満足させるものが保証されるかどうかはきわめて不明瞭である。

結 論

本論は、Durkheim の『自殺論』と Weber の方法論的諸著作にまで遡ることができる、社会学が取ってきた方針に関するものだ。¹⁹⁾ その[社会学の] 決定的な特性は、社会学が主題として扱わなければならない社会生活の特性としてではなく、常識カテゴリを社会学の資源として受容することだ。

ひとたびこの特性が社会学の特徴となるとときには、Durkheim とその追従者の方針、すなわち、常識カテゴリによって分類されていると想定される現象の諸変異を説明すること、そして、Weber とその追従者の方針、すなわち、エトセトラ問題を前提としつつ一般化された記述と実践的な有意さへと志向することが、われわれの目

的となるだろう。そして両者の方針に従うのは容易なことだ。

もちろん、実践的理論家となるという選択をして、あの隠喩のなかの輩のようにふるまうこともできるだろう。しかし、社会生活の科学を構築しようとする人にとって、本論文のメッセージは、社会学が向かっている方向が最終的にそのような科学へとたどり着くものではないということだ。

このことを考えたことがあるひとにとってはひょっとすると明白であるかもしれないが、エトセトラ問題はどんな科学も直面するものだと Weber が主張しているのは誤りだ。すなわち、それ [エトセトラ問題] の発見は世界があまりに複雑なので文字通りの記述は不可能であることの見解だという [誤った] 主張である。たしかに世界が記述不能であることの証明を提出したひとはいない。実のところ、そのような証明とはどんなものでありうるだろうか?²⁰⁾ 記述が未完成であるという問題は、Weber が考えていた記述のもつ2つの特性によるものと思われる。第一には、それ自身が分析の対象とされたことがない言語で書かれているということ、そして第二に、それらの記述は共通経験に訴えるものであるということ。

原 注

1) 本論文の論点のほとんどすべては、ここ数年間に行われたカリフォルニア大学ロスアンゼルス校の Harold Garfinkel 教授との数多くのミーティングの準備として、あるいはその最中に、または、その帰結として発展させたものである。

Garfinkel 教授は、これらのミーティングとこれの (ほとんどが未公開の) 著作を通じて、これ

らの考えにとっての刺激であったのみならず、ときにはわたしがこの仕事を追求するための資金を提供してくれた。かれへの恩義は、この論文の本体において参照することによってほんのわずかしが表すことができないほどである。また、わたしが述べなければならないすべてにたいして、Garfinkel 教授が賛成しているわけではないということをつけ加えておくべきだろう。

この仕事は、国立精神衛生研究所からの博士号取得前の特別奨学金 (MF-17,547) を受給している期間になされた。また、アメリカ空軍の資金援助を受けた「決定における判断を妥当化するための諸方法」についてのプロジェクトの助成も受けている。本論の拡張版は、このプロジェクトの報告書に掲載される予定である。

- 2) 前カリフォルニア大学パークレイ校の法と社会研究センター在籍。現ロスアンジェルス自殺科学研究センター。
- 3) 実際にありがちなのは、社会学者が「自分自身で観察するのではなく」逸脱頻度を報告する統計を研究することだ。だが、社会学者は、たとえば犯罪に関してこれをするのいくぶん決まり悪さを感じている。というのは、少なくとも Sutherland 以降、有罪判決や警察報告はまったく正確であるというわけではないことに気づいているためである。のちにわたしたちが見るように、そのような正確さの問題はしごく取るに足りない問題である。
- 4) 社会学の歴史について言うと、Durkheim の『自殺論』が探索のお手本とされたこと以上に悲劇的なことはない。この点については、さらに以下の 80 ページを参照せよ。
- 5) 「言語のある区分の記述」という考えは社会学者にとって一見したところ奇妙なものであるが、言語を記述するというのは、けっして知られていない活動というわけではない。たとえば、文法を構築することによって、言語学者は「言語のある切片区分の記述」のひとつの意味を作り出している。たとえば、Z. Harris の『構造言語学の方法』

(1951) を参照せよ。心理学者の B. F. Skinner は、その著書『言語行動』(1957) の中で、言語の記述についてのまた異なる考えを提示している。しかしながらわたしの知る限り、社会学者は、知識社会学者でさえ、この問題に取り組んではいない。

- 6) わたしたちは、(もしわたしたちが実験を使うのなら) 実験がどんなデータを生みだすかを予測するのであって、厳密には人びとがなんと言うかを予測するのではない。なぜなら、データ[となるの]は、人びとの言語についてのわたしたちの記述のアイテムであり、人びとの言語のことば[すなわち、人びとが話すことば]ではないからだ。つまり、人びとの言語のことばは、データへと変化されなければならない「生の素材」を構成している。人びとが使用する言語内でのさまざまな発言は、「同一の」データを構成しているかもしれない。
- 7) 「常識的視角」という考えは、1959年にミラノで開催された世界社会学会での Harold Garfinkel の論文「社会構造についての常識的知識」で十全に展開されている。
- 8) よそ者自身が提起する問題は、Alfred Schütz の「よそ者」論文、*American Journal of Sociology* 49 巻において素晴らしい分析がなされている。
- 9) 翻訳の問題については、W. Quine の『ことばと対象』(1960年)のとくに2章を見よ。
- 10) 読みのこのような多様性が、現在の社会学の著述のどんなものについても可能であるということは、Garfinkel 教授がわたしにたいして強調したことだ。
- 11) この考えも Garfinkel 教授に負っている。
- 12) Parsons の『社会的行為の構造』にしたがって、「利点」ということばを用いる。[“Far from the natural sciences having the advantage in understandability,” (Parsons 1949: 583) とあるが、邦訳では「自然科学は理解可能性においてすぐれているどころか」と「advantage」を「利点」

とは訳してはいない（稲上他訳 第4分冊 1974: 171).]

- 13) 主観的な [subjective] 視点を採用するかどうかという問題はここには含まれていない。主観的な視点を採用することは、その主題 [subject] に即して社会学者のみが使用するもの、あるいは、ほかの科学者に比べて社会学者がより容易に使用することができるような視角を採用することではない。それはただ以下のことを意味するだけだ。つまり、世界はそれらの、つまり、主題 [subject] に独自のやりかたで影響する（あるいは主題 [subject] によって影響される）力という観点から考えられるということである。そこで、たとえば、量子力学の発展は、天文学的視角から原子内/下の物体の視角への物理学のシフトによってなされてきたと言うことができよう。
- 14) Durkheim の『自殺論』について大きな難点は、かれが公式統計を利用したことではなく、かれが実践的理論の問題 [Sage 版の強調。初出にはない。] を社会学に採用していることだ。「自殺」は自然言語のカテゴリーである。そのためにたとえば、ある自殺を説明することや自殺率が変化に富むことを説明するといった多様な実践的問題につながる。たとえば、自殺報告における変異を研究することではなくむしろ、公式統計を使用したことが Durkheim の過ちだと言うことは、社会学者が「本当の自殺」であると見なすべき事象が生じているのは明白だと想定することである。これにパラレルな議論が犯罪について提起されている。Clinard の *Sociology Today* p. 528-9 を見よ。自殺があったという決定が組み立てられるのはどのようにしてかについての探索、「自殺をする」とそれを語るために対象はどのように把握されるべきかについての探索、これらが社会学にとつての端緒となる問題である。自殺分類をどう組み立てるかについての手続き的な記述を産出すると、興味深い社会学的問題を構成するのはカテゴリーとその適用の方法論であるということがわかるであろう。われわれは人びとを「可能な自殺

者」とみなす [ことを研究する] という選択を行うのではない。むしろ、いかにしてひとという概念がたがいの行動の範囲を査定するときによいように使用されるのかを探索することをわれわれは選択することができよう。

いずれにしても、われわれが自殺というカテゴリーを記述するまで、つまり、そのクラスを組み立てるのに利用される手続きの記述を産出するまでは、このカテゴリーは、潜在的にすら、社会学装置の一部になりえない。^{訳注6}

[そのように] 記述されていないカテゴリーを利用するということは、子どもの本 [絵本] に見られるような記述を書くことだ。ことばのまとまりのあいだに対象の絵がある。直示的な定義はひょっとすると賞賛にあたいするかもしれない。しかしながら、私には「行為」の直示的な定義がどのようなものかはまったくはっきりしないものだ。

- 15) 人間に関するその他の科学の中で、科学者と対象 [subject] とが教理問答書的な関係に位置づけられることができるかどうかという問題は、大きな関心の主題 [subject] となってきた。たとえば以下を見よ：Brindly, G. S. 1960 『網膜と視覚伝導路の生理学』4章；Edwards, W. 1961 *Psychological Review* 68巻；Swets, J. A. 1961 *Science* 134巻。[原著には、雑誌論文の開始ページもあるが、誤りがあるためにここでは省いた。書誌情報は末尾の文献リストに補った。]
- 16) 本段落で議論された事柄については、Cassirer の『実体概念と関数概念』の1章を見よ。
- 17) ここで、「理想の対象 [ideal objects]」を適切に用いる学問として物理学を持ち出すことには意味がない、というのは、実をいうと、われわれはかれらのようにそれについての数学的对象間の数学的關係が確立されているようなモデルを持たないのだから。つまり、理想的な理性的行為者に関してさえ、その理性を前提として特定の状況においてかれらがある特定のやり方で行動するであろうということは、たんに仮定されてきただけにす

ぎない。抽象的な行為者がある特定のやり方で行動するであろうということは証明されていないのだ。この問題が些末であるということ、つまり、われわれの理性的な行為者がどのように行動するかについて実際に証明を組み立てることができるということは、まったく明瞭でない。抽象的対象にたいしてさえ必然関係は確立されていないし、実のところどの必然関係が適切なものにみえるかを選択するデータが欠けているので、物理学がわれわれのこの理論的企て〔一般化された記述を書くこと〕を保証すると主張するのは傲慢である。

- 18) エトセトラ問題が「理論化」の価値を低下させるのみならず、エスノグラフィ的事例報告の貢献に（見知らぬ地域や人びとになじませるという常識的なその使用を別にすると）疑問を投げかけるということは注目にあたいる。エスノグラフィ的事例報告が少なくとも「ハード」であるとか、それを基盤にして理論が樹立できるような基礎的要素〔building blocks〕であるという保証はない。要するに、社会学に理論がないのはその Tycho Brahe [天文学的観測データの十分な集積を残し、ケプラーによる理論化の基礎を作った人物]を待っているからなのだということは定かではない。

- 19) 社会学が採用しているアプローチはさらに先まで遡ることができるのはもちろんのことだ。しかし、社会理論家を自認する人にとってはそのようなアプローチはまったく適切なものだ。この学問の立場がシフトさせられる必要があるのは、社会生活の科学を産出したいという関心を前提としてのことだ。科学を産出しようとしていない者にとっては、現行の立場が根本的に問題があるものと考えられる必要はない。

社会理論についてさえ、Marxの金言（『フォイエルバッハに関するテーゼ』からの）とともにある種の革命が示されていることに言及してよいかもしれない。「人間の思考が対象〔客観〕的真理を手に入れる力を持っているかどうかという問題は、理論の問題ではなくひとつの実践の問題であ

る。実践の中でこそ、人間は自分の思考の真理性、すなわち現実性を証明しなくてはならない。」Marxは社会理論にとって、かれの「システム」（それはシステムのひとつにすぎないが）ゆえではなく、「素朴な社会理論」の終わりを実質的に示しているがために重要である。Marxは、理論家が社会を「発見する」のではなく、観察によって「そこに、世界の中に」社会があるのを発見するわけでもなく、生じたことを単に記録するわけでもないと認識していた。かれの主張によれば、実践の問題に関心のある理論家は、それを実現するのが他者の問題であるような解決策を書き上げることに満足すべきではない。かれは、客観的社会理論を適用されるべき理論と定義することによって、科学的証明〔demonstration〕の実践的相関物、すなわち成功、を理論家の肩の上に（科学者というものは証明という自身の義務を引き受けるのだから）置く。たしかに現実離れしているとしても、われわれは、社会理論の可能性のただのテスト証明にMarxが従事していると読むこともできよう。かれは困難な事例、たとえば、未組織の公民権のない社会集団を選んで、人びとの行為のみがそれを正しいものとできるような、社会の「記述とされているもの」を提示する。そしてつぎにかれはその「意図された記述」を実現しようところみ、その結果その理論の正しさが証明される。このすべては、「たんに」ある主題の科学的証明という課題と相関的である社会理論の課題を証明するためだけのものにすぎないのである。

- 20) それはつぎのようなものだろうか。「しかしながら、いまや世界は並外れて多様なものであるということが知られている。それはひとつかみの世界〔単数〕を取って詳しく見てみればいつでも確かめられることである。」Kafka, F. 「たとえとパラドックス」1961, p. 41.

訳注

訳注1] Harvey Sacks による Sociological description, *Berkeley Journal of Sociology* 8: 1-16. 1963 の全訳である。邦訳許諾は *Berkeley Journal of Sociology* 誌編集委員会より得た。本訳文作成にあたっては、樫村志郎、岡田光弘、酒井泰斗の諸氏、また、EMCA 基本文献研究会参加者の協力を得た。記して謝意を表したい。

翻訳作業は、上記論文を元に行った。この論文は、Coulter ed. 1990 と Lynch and Sharrock eds. 2003 に再録されている。節や項の配置といった論文の構成については、最新のものである後者（「Sage 版」と呼ぶ）にしたがった。

() は、原著者による注記である。

「」は、原著者による引用を示す。

太字は、原著者による強調を示す。

[] は、訳者による注である。原語の提示にも [] を使用している。

訳注2] 「segment」を「区分」と訳している。「部門」や「切片」、「断片」という訳語も考えられるが、その部分全体としてなんらかの組織的なまとまりや秩序があることを含意することばとして「区分」を採用した。

訳注3] 本訳文においては、「use」を「使用」、「employ」を「利用」と訳語を分けている。原著者がどれだけ意図的に区別しているかは不明である。

訳注4] 動作部分と言う部分についての理解の有無に応じて、4つの遭遇[者]を区別して考察していくのがこの節である。言っていることがわかるが行っていることはわからないのが素人であり、常識的視角と呼ばれる。逆に、動作は理解できるが言っていることがわからないのが外国人エンジニアであり、よそ者視角である。双方を理解しているのが実践的理論家である。どちらもわからない遭遇者に含

まれるのが、ナイーブな科学者である。現在の社会学者は、人びとの言うこともしていることも両方がわかっていると自分では考えているので実践的理論家と同じと位置づけられている。

訳注5] この強調は初出時にはなく、Sage 版に見られるものである。

訳注6] この段落は、小宮による訳があり参照した(2011: 24)。

訳注7] 原注15を含めてこの段落の「subject」と「object」は気になる。「主題」と「対象」と訳したが、それが適切かというのは気になるところだ。

訳注8] 「always」がSage 版では強調されている。初出でも、Parsons の原著でも強調されてはいない。不思議なことだ。

訳注9] 「complete」の訳語としては、「完全な」も考えられるが、「完成した」や「完結した」という意味で理解するのが良いと考えている。エトセトラ問題のように、記述の可能性が多数あり、その可能性が尽きるまでのすべてをカバーしたものという意味である。野球の話だが、先発投手が1試合を投げきるのを「完投 (complete game)」と言う。「完全試合 (perfect game)」というのは、一人の走者も許さないう完投することを言う。つまり、瑕疵がまったくないこと (完璧) を「完全」は想起させるので、あえて「完全」という用語は使わないことにした。

文献*

*引用されている文献と原論文の再録先をリストとしている。

Brindly, G. S. 1960. *Physiology of the Retina and Visual Pathways*. Arnold.

Cassirer, E. 1953. *Substance and function; and, Einstein's theory of relativity*. Dover.

Clinard, M. 1959. Criminological research. In Merton R.

- et al. eds. *Sociology today: Problems and prospects*. 509-536. Basic Books.
- Durkheim, E. 1952. *Suicide: A study in sociology*. Routledge.
- Edwards, W. 1961. Costs and payoffs are instructions. *Psychological Review* 68: 275-284.
- Garfinkel, H. 1959. Aspects of the problem of common sense knowledge of social structures. In ISA, Transactions of the Fourth World Congress of Sociology, 4, 51-65. Milan: Stressa. In Garfinkel, 1967. *Studies in ethnomethodology*. 76-103. Prentice-Hall.
- Harris, Z. 1951. *Methods in structural linguistics*. University of Chicago Press.
- Kafka, F. 1961. *Parables and paradoxes*. Schocken Books.
- 小宮 友根. 2011. 『実践の中のジェンダー：法システムの社会学的記述』新曜社.
- Parsons, T. 1949. *The structure of social action*. Free Press. = 1974-89. 『社会的行為の構造』全5冊. 稲上毅；厚東洋輔訳. 木鐸社.
- Quine W. 1960. *Word and object*. MIT Press.
- Sacks, H. 1990. Sociological description. In Coulter, J. ed. 1990. *Ethnomethodological sociology*. 85-95. Edward Elgar.
- Sacks, H. 2003. Sociological description. In Lynch, M. & Sharrock, W. eds. *Harold Garfinkel*. II: 203-216. Sage.
- Schütz, A. 1944. The stranger: An essay in social psychology. *American Journal of Sociology* 49: 499-507.
- Skinner, B. F. 1957. *Verbal behavior*. Prentice-Hall.
- Swets, J. A. 1961. Is there a sensory threshold? *Science* 134: 168-177.